

国境型マラリアの村落調査短報

“Border Malaria” village study preliminary report: Interview summary

益田 岳

Gaku Masuda

Kyoto Working Papers on Area Studies No. 132

August 2015

本ワーキングペーパーシリーズは、京都大学の地域研究統合情報センター、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、アフリカ地域研究資料センターならびに東南アジア研究所が共同で出版しています。

下記ウェブサイトで閲覧することが可能です。

(Japanese webpage)

<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/edit/ja/kyoto-working-papers-on-area-studies/>

(English webpage)

<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/edit/kyoto-working-papers-on-area-studies/>

©2015

京都大学地域研究統合情報センター
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
アフリカ地域研究資料センター
東南アジア研究所

〒606-8501
京都市左京区吉田下阿達町46

この論文の著作権は京都大学東南アジア研究所に所属します。

ISBN 978-4-906332-30-4

論文の中で示された内容や意見は、著者個人のものであり、
東南アジア研究所の見解を示すものではありません。

国境型マラリアの村落調査短報

益田 岳

Kyoto Working Papers on Area Studies No. 132

August 2015

国境型マラリアの村落調査短報

益田岳^{1**}

“Border Malaria” village study preliminary report: Interview summary

Gaku Masuda¹

This document is an interview summary based on malaria research conducted nearby the Indonesia and Malaysia border area located in the inner Borneo Island, where malaria, namely plasmodium vivax has been endemic at least since early 1990 up to 2010. Although the content of this interview is limited in many ways, we are preparing an integrated paper intended to raise public awareness on the reality of life and diseases in a tropical area in the near future. The local population who lives in the middle of the oil palm plantation without working in the plantation has difficulty subsisting. They have to rely substantially on the city: in this interview, a middle-aged female farmer supports her whole family by means of daily rubber tapping and work in the rice field. However they only manage to cumulate under half of the poverty line income.



¹京都大学東南アジア研究所 gaku@masdas.net

1. 地域の概況

調査地として PT 村を選んだのには理由がある。この地域が過去 10 年以上にわたり、コンスタントにマラリア患者をだしていることが疫学データの分析から判明したためである。マレーシアのマラリア感染形態にはいくつかあるが、そのひとつであり、新型サル・マラリア登場まで主要なものと考えられていた東南アジアの国境でおもに発生数が多い特徴をもついわゆる国境型マラリアである。東南アジアにおいて、国境型マラリアは河川などの国境を越えてくる住民による越境型マラリアと、国境地帯の生態的特徴と森林依存型生活からくる森林型マラリア、および両者の混合型に大きく分けられるが、この村はよりミクロに見れば、



森林型マラリアの特徴を備えている。この村は 2009 年で人口 284 人、世帯数 73 戸。上記写真の山向はインドネシアである。この国境地帯と、それに付随するアブラヤシプランテーションに囲まれている。数十メートルの高度をもつなだらかな起伏が国境付近の山まで数キロ続く。村に気象観測装置を備え付け、2 年ほど降水量や気温、湿度などの基本的な気象データの観測を行った（右写真）。この地帯では、気象は過去のデータを見る限り、クチン市内とよく一致しているように見える。月積算気温はクチンとよい一致をみせ、ほぼ同一とみなして良い。年雨量は 6 年周期くらいで振動しているように見える。2000–2010 年まで例外なく 1 月は大雨を迎える。温度は通年で非常にフラットであり、最高・最低気温月比較では温度差が 2 度しかない。2000–2010 年の患者発生状況は 3 日熱マラリアが 100 例、熱帯熱マラリアが 30 例、卵形マラリアが 5 例である。卵形マラリアの 5 例はサラワク州の他の例 [B. Singh 2004] からみてサルのマラリアがヒトに感染した人獣共通感染症として近年話題になっている *p. knowlesi* (プラスモディウム ノウリサイ) の可能性が高いと考えてよいだろう。

2. インタビューの背景

場所：サラワク州ルンドゥ地区PT村 マラリア対策プライオリティ地区P1

語り手：E家

インタビュアー：益田岳、Kishen Bunya²、Madina Adrus*

使用言語および語彙：半島マレー語、サラワク方言マレー語、ビダユ、イバン、英語

現地語から英語への翻訳：Madina Adrus、Kishen Bunya

英語から日本語への翻訳：益田岳

日付：2010年2月

3. 語り手の背景

名前：Mの子E

年齢：53歳

性別：女性

職業：稲作農家、ゴム林農家

ステータス：結婚している

月收入：RM400³



4. 物売りのインドネシア人と見間違われたインタビュアー一行

この聞き取りはEの家で約2時間かけて行った。家の中にはEと2人の娘がいた。聞き取り開始から半時間ほどすると、隣の家から心配した義理の娘がのぞきに来た。その後、義理の娘も会話に加わった。あとからわかったことだが、Eは当初家のなかに我々を招き入れるまでは、我々のことを、アルミ鍋を売りつけに来たインドネシア人商人だと思っていたようだ。泥で汚れていない小奇麗な、大きな四輪駆動のハイラックスに乗ってやってくるのは、ここでは金物・雑貨売りくらいだということだ。私は地元の大学からマレー人女子学生とイバン人男子学生（いずれも院生）を同行していた。この組み合わせが幸いし、鍋売ではないかもしれないと怪訝に思い、出てきてくれた。そうでなければ家のなかで居留守してやりすごしたと笑って教えてくれた。なんで居留守するのですか？と一応聞いてみると、「私は余計なお金がない。何か売り物を持ってきている人だったら買わないといけないことになるから」と答えてくれた（上写真は物売りに間違われた我々の格好）。

5. 村の生活

Eさんは地面にコンクリートのベタ基礎を打ったその上にブロックをつみあげただけの、

² サラワク州立大学動物学 資源科学技術学研究科

³ 2009年のマレーシアの貧困ラインはサラワク州で912リンギット/4.8人世帯である。この家庭は貧困ラインのさらに半分ほどの収入、つまり貧困定義でいうところの極貧ラインで4人が暮らしていることになる。貧困ラインのデータはCIMB, Economic Update, May 2, 2012 (<http://goo.gl/5QORxE>)による。マレーシアではラバータッピング労働者の不満から1951年にはやくもEPF制度がはじまった。しかし、この家族は現在、そのような保護制度の枠外で生きている。

簡素な家に住んでいる。床は基礎のコンクリート打ちっぴなしそのまま、敷物もない。地面からの高さは10センチもない。すこし大雨が降ればたちどころに室内にまで浸水するだろう。このあたりにはそのような床が地べたと同じ高さの新しい家が多くみられる。もう長年猛獣や洪水の被害がないか、あってもたいしたことがないと考えているからだ。今日でも少し古い木造の家は、地面から1～1.5mほど高くつくられている。

Eさんの家は東向きで、目の前には大きな空き地があり、イヌとブタ数匹が走り回っている。同行したマレー人女子学生はイヌもブタも宗教上の禁忌動物であるため、大変に怖がっていた。まわりでは牛は一頭もみかけない。そもそもボルネオ島で生きた牛を見かけることは非常にまれである。その理由として、牛は高価だからと説明してくれた。子牛を買うのも高く、育つまで時間がかかり、たいていの家ではそれまで待つことができない。ニワトリはどの家にも何羽かいる。カゴを伏せたものなのか、家の裏手の小屋に飼っている場合が多くみられた。ブタは放し飼いか、小屋飼いだか、いずれも静かだった。ブタにありがちなうるさく鳴き続けるものは一匹もいなかった。イノシシとの交雑種と見受けられるものも何頭か見かけた。しかし、そのいずれもEさんの所有ではないようだ。

この地域では電気が入ったのも数年前と新しく、まだ冷蔵庫をもっていない家庭もある。井戸やポンプもみかけない。水はおもに天水に頼っており、足りないときは200mほど離れたところにある川に汲みに行く。川と居住地との高低差は2～4mほどしかないため、水汲みといってもそれほど重労働というわけではない。

生きていくためには水が欠かせない。E家の場合、家屋の西側、壁に隣接した屋外に、直径2m、高さ2mほどの巨大な青いプラスチックのタンクがある。ここに生活に必要な水を蓄えている。水源は雨だ。雨が屋根におち、雨樋をつうじて集まるようにしている。夕方には太陽の直射で水温はかなり高くなり、電気ヒーターを使わなくてもほぼ毎日暖かいシャワーを使うことができる。

彼女はこの水タンクで蚊が繁殖しないよう、開口部をネットで封止している。網をつけたことで、シャワーや飲料といった日常活動で消費する際にも以前より安全になると言う。

彼女は説明していないが、私の観察によると、この村の人がタンクに網をつけるようになったのは2009年からだ。政府のデング熱対策に厳しい罰則規定がつき、保健所の担当者が「蚊一匹みつけるごとにRM100の罰金」と彼らを脅すようになったからである。この罰則規定は少なくともこの4年ほど非常に有効に作用しており、どの家もきっちりとタンクに隙間なくフタをしたり、網をつけている。2008年に筆者が調査をはじめた当時のようにタンク内に成虫蚊が休み、ボウフラがうようよするということはなくなった。仮に卵が投げ込まれても、羽化した蚊は網を越えられず、いずれ溺死する。このため貯水槽由来の蚊による吸血の被害はなくなる。とはいうものの、このあたりで毎年死亡者を出すマラリア媒介蚊は通常このような水源に繁殖することはない。そのため、貯水槽対策はマラリア蚊抑制には効果がない。

それが証拠に、網設置の以前と以後を比べても患者の発生数には大きな変化がないことがあげられる。

河川の水も生活に利用可能だ。しかしEさんの家からはかなり遠い（約200mほど）。このため、E家ではほとんどの場合、水供給を天水に依存している。

6. 仕事場と蚊

彼女は、稲作農家とゴム採取・一次加工者として働くことを現在の生業にしている。ゴム採取のためには、午前5時とくには午前3時や4時に起床する。ゴム林でも、この時間帯にはまだ蚊が飛んでいない。彼女によると、蚊が気になりだす（吸血にくる）のは午前6時から7時だという⁴。Eさんは、いままで一度もマラリアに感染したことがない。彼女は蚊に刺されないよう、作業時には常に長袖のシャツを着て、長い巻きスカートの格好で、喫煙（乾燥したニパの葉とタバコ）するようにしている。煙が蚊を追いやるからだ。彼女の経験では午後でも蚊に刺されうるとのことである。光の侵入が少ない森の暗いところでは、午後でも蚊が刺してくるといふ。蚊は身体の一部が露出している場所があると刺してくる。防護する何かを着ていないところを刺すのである。であるから、適当な服を着ていけば刺されないですむといふ。顔のあたりによってくる蚊をさけるためにはタバコが効果的だと。一方、この村では夜には蚊がまったくいないのだと彼女は力説する。

彼女は釣りが大好きなようだ。以前は一日中釣りをしていたことさえあった。釣った魚は家族の食事になる。しかし今ではかつてのような漁獲がない。油ヤシのプランテーションができるにしたがって、川の魚の数が減少していったと言う。そのため、彼女が釣りに行くことも少なくなってきた。今でも seluang⁵という種類の魚はまだ川にいる。しかし、今日では、彼らは魚を食べるために、もっぱら市街地のルンドゥにまで出て買いに行くようになった。

7. 病と医療

ここでは、彼女が考えるに、病気を防ぐために2つの方法がある。ひとつは伝統的なもの（呪医、ハーブや選択ジャングル植物/果物）で、もうひとつは病院や診療所での医薬品である。彼女の話には治療行為とは薬品つまりモノであり、医者や看護婦といった行為者の話は呪医であるボモの話以外は一切でてこなかった。

病直しのためにボモ（呪医）を使ったことがあるかとの問いに対して、彼女はクリニックのほうがより効果的だと答える。過去には、ボモをたよったこともあった。しかし、ボモが

⁴ サラワクの日出の時刻と一致している。

⁵ おそらく河川に棲むスナップフィッシュの一種だが、この名称が一般的ではないため同定できない。

亡くなってから、それもしなくなった。同じ頃に村人の多くがクリスチャンになったことも関係している。

彼女は昔は腹痛、頭痛、発熱を治すためにランサツの樹皮を使った。ランサツの皮を煮沸し、その煮だした水を利用する。これは病気を治すために使うことができ、飲んでも安全である。彼女は、診療所からの医薬品よりも、このような伝統薬（クリットランサツ）をはるかに好んでいる。

メモ：西洋医療にアクセスがある場所で、伝統的医療（呪医）を尋ねると、事実がどうであれ呪医を否定するコメントがでるのが普通である。この場合もこのコメントだけでは事実は不明だが、呪医を使わなくなったことと呪医が亡くなったことが関係あるようだと読み取れる、呪医がいる間は呪医を使っていたと理解できる。話者はクリニックが効果的だといいつながりながら伝統薬を好むとも言う。このような一見矛盾した話の裏側に横たわる事実は様々なので注意深くアプローチする必要があるだろう。

8. マラリアとインドネシア国境

E さんにはインドネシア側に親戚がいる。しかし彼女自身はインドネシアの親戚の家に行ったことはない。彼女の親戚は BS 村にいる。この村は 5km 先の国境の向こうにあり、距離的には非常に近い。

彼女は、この地域のマラリアはインドネシアから持ち込まれていると言う。インドネシアからのマラリアは危険であり、「悪」である。

こう述べながら彼女はとくに忌み嫌うような表情をしたわけではない。聞き手には、なにかとつけてきたような説明に聞こえる部分だった。背景には、この地域で公衆衛生的に問題となっているインドネシア人不法労働者のゴム林での隠匿とそこが発生源とおもわれるマラリアの度重なるアウトブレイクに、地元の保健所が疑いの目をむけていることを意識してのコメントであるとも理解できる。

9. 政府の行動

彼女が住む村でのマラリア流行抑止のために、政府が行っていること⁶を支持していると言う。行政が行っていることとは、殺虫スプレーをまくこと、すべての家に蚊ネットを与え、厳しい規則を設定することなどが含まれている。スプレーは、通常半年ごとに行われる。その際、影響ではっきりした蚊の減少がみられるとのことだ。

メモ：しかしこの説明は矛盾している。スプレーは村落の家屋にのみ行われるが、前述のように蚊は村落内にはいないと述べているからだ。つまり、スプレーによって蚊が減少してい

⁶ 定期的な殺虫剤噴霧、蚊帳の提供、患者がでたときの全員血液検査と緊急噴霧など。

るとするのは私のインタビューがまわりまわって読まれうるだろう政府へのリップ・サービスだと読むのが適切かもしれない。

効果の一方でスプレーが村人の皮膚や目の炎症を引き起こしていることも経験している。目の炎症で、彼女の家族は眠ることができなかった。

PT 村が含まれる行政区ルンドゥの保健部門は、村全世帯に蚊帳と薬品を与えた。しかし、夜間に家の中に蚊がいないため、実際には睡眠中に蚊帳を使うことはなかった（早朝、日中、夜間の村落外にしか蚊はいないということ）。

メモ：村落内に蚊がいない、家のなかにはいないという説明はさすがに大げさか、事実を反映していないとしか言い様がない。事実、調査中にも日中にもかかわらず何度も私は家屋の隣で蚊に吸血されているし、屋内でも吸血経験がある。

10. 世帯の収入

彼女は家族の収入形成のために、ゴム採集者として働く、と述べた（右写真はそのゴム林）。収入は台所用品と、子供の学費の一部となる。7年前まで彼女は収入（RM14.00/日）のために、ゴムプランテーションの労働者として13～15年間働いた。しかし、彼女は過酷な労働をする



にはもう年をとりすぎており、もはやゴムプランテーションの労働者にはできない。さらには、プランテーションは家から遠く、歩いていくととても疲れる。オイルパームのプランテーションとともに電気と学校がやってきた。彼女は他人と会社で働くより、今は自宅横でゴム採取者として一人で仕事することが好みだ。子供の費用を除けば月に RM50-100 もあれば、家族を支えるには充分である。お金が足りない時には、親戚や友人から借りる。支払いは先延ばしにしてもらえばいいのである。

11. 食料源

彼女は家族のために、いくつかの野菜栽培と稲作をし、豚も飼育している。一部の豚を屠殺し、残りは生かしておく（中には天寿をまっとうする豚もいる。そのような老齢豚の肉は食べない）。米としては陸稲を植えており、買うことは米を買うことはない。自作農の収量

のみで家族には十分な米がとれる。

シダは野菜として使うため、時々森林から採取してくる。他にも森林から取る植物がある。5年前、ドリアンのシーズン中にマラリア患者が発生したことがあった。ドリアンを守るためにドリアン畑で寝起きしていたときに感染した。

参考文献

Balbir Singh, Lee Kim Sung, Asmad Matusop, Anand Radhakrishnan, Sunita S G Shamsul, Janet Cox-Singh, Alan Thomas, David J Conway. 2004. “A large focus of naturally acquired Plasmodium knowlesi infections in human beings”, Lancet 363: 1017–24

Lee Heng Guie, “Minimum wage policy” as CIMB, Economic Update, May 2, 2012
(http://etp.pemandu.gov.my/upload/CIMB-Minimum_wage_policy-Curse_or_Cure.pdf)

